

2学年音楽科における「意味と内容」のひろがり

2年C組 土橋 由美

— 題材『いい音さがして』の学習をとおして —

1 子どもに対するねがいと学習指導のねらい

音楽科における追究の対象は『音』である。『音』を感じとり、『音』を楽しみ、『音』を愛するために、視覚的に、聴覚的に鑑賞活動を多く取り入れて「見る」「聴く」ことに重点をおいた。そのためには、CDやDVDを利用して、注意深く聴き、従来の「聴く」だけの鑑賞でなく、「見る」ことによっても『音』を楽しみ、『音楽』を愛する気持ちをもたせたいと考え、活動を進めた。

色々な音色の曲を聴き、音の響きの違いに気づいたり、自分でも音の出し方を工夫したりしながら、音色に関心を持たせたいと考え、単元を構成した。そして、聴こうとする態度を養いながら、「いい音」を探していきたいと願い、活動を進めてきた。

本単元では、『ポルカ（クラリネット・ポルカ、ピチカート・ポルカ、かじやのポルカ、山のポルカ）』を扱い、その軽快なリズムを体感しながら学習を進めていった。まずは、『いい耳で聴く』ことを約束した。そして、まねっこすることから始めた。オーケストラや吹奏楽の演奏を見たり聴いたりして、楽器を演奏するまね、指揮者のまね、リズムに乗って踊るまね等をおこなった。当然、まねっこをしようと思えば、よく見たり、よく聴いたりしなければならない。子どもたちはグループごとに、また、一対一でお互いの表現を見比べながら、表現することを楽しんだ。『ポルカ』のリズムは、のりやすく、ほとんどの子どもは自然と体が動いていた。

そして、見たり聴いたりした曲の中で演奏している楽器にも興味を示す子どもたちもいて、楽器の名前やどんな音がする楽器なのか、調べ始める子どもたちがでてきた。そこで、小学校には、置いていない楽器については、中学校に行き、見せてもらったり、演奏を聴かせてもらったり、実際に楽器を吹かせてもらったりした。また、クラリネットの制作工程のビデオを見たり、種類の違うクラリネットの音色を聴いたり子どもたちの『音』に対する興味は広がっていった。

色々な音色に関心を持ちながら得た知識や、体感したことが、自分たちが『山のポルカ』を演奏する時に生かせることを願い単元を構成した。このような活動を通して、『音』に対する興味関心を広げていった。

2 二年生の子どもがとらえた「意味と内容」

子どもは、「音」とかかわることで色々な想像する。これを音から受ける「感じ」とすると、「感じ」は、子ども一人ひとり違って良い。一人ひとりの「感じ」は固有のものである。この「感じ」を音で表したり、リズム打ちで表したり、身体全体を使って表したりすることが、音楽的コミュニケーションであり、本単元のねらいである。音楽的コミュニケーションによって表現された「感じ」は「気づき」である。「感じ」から「気づき」をもち、「気づき」を互いに共有しながら、深め広げることが、音楽科における意味の広がりである。したがって、本単元では「感じ」の根拠を見つけ、「気づき」をもつために、注意深く「聴く」「見る」活動（DVDの視聴）を繰り返しおこなってきた。また、「気づき」を音符で表したり、演奏したりすることを通して深め、広げていく。「気づき」をもつこと、それを、広め、深めることが本単元の

子どもにとっての「意味」の広がりである。

教科提案にあるように、「意味」は、子どもの立場から出発して、普遍性に向かい、「内容」は、教師の立場からのアプローチである。つまり、「内容」を構成するものは、教材及び、指導法である。子どもたちは、鑑賞によって、感じて、感じたことから、技能面の「気づき」を得、その「気づき」を表現に生かしていく。「鑑賞」から、「表現」へと「内容」が広がっていく。

この学習では、『ポルカ』を扱うこと、そして、ポルカのリズムにのって演奏させたり、身体表現をさせたりすることが「内容」である。

※ 『かじやのポルカ』の実際の学習場面から

授業の初めは、曲のさわりの部分、少しだけを聴いた。しかし、子どもたちは、金床の音色に耳を傾けた。そして、音楽では聴きなれない音に「不思議な音」という表現をした。「シンバル?」「トライアングル?」「そんな楽器の音じゃない!大きなカンのつつみたいなのをたたいてる音!」「金属を何かでたたく音?」「かなづちでたたいてる音!」と今までに聞いたことのある音の中から、あれやこれやと想像をめぐらせながら、自分の感じたことを言葉で表現し始めた。また、友だちの感じたことにも耳を傾けだした。

子どもたちが「感じ」を言葉で表し、交流することで、「気づき」をもととした場面である。

次に、曲を全部通してDVDを見て、金床を金槌でたたいている音だということが分かる。「金槌でたたくのだったら自分にもできる」と、思った子どもたちは、途中から手で金槌をもったつもりでまねをしてリズムを打ち始める。初めから二拍子のリズムにのって聴いている子、身動きをせず、映像に見入っている子に分かれた。教師が指示を与えなくても子どもたちの体は、自然に動き、ポルカのリズムを体で表現していることになる。曲の最後に、金床の音が響くので、この時の音が自分のまねっことあった子どもたちは、「バッチリできたあ!」と大声をあげた。こうなると、3度目は、「金床をたたきたい!」ということになる。

ここでは、子どもたちは音楽的な表現で、「感じ」を表している。「鑑賞」から「表現」へと「内容」を広げながら、自分の「気づき」を確かめている。

しかし、3度目は、金床の音色に集中させたいと考え、聴くだけにした。4度目は、視聴させ、三人の子を指名して、表現させようと考えていたが、表現するまでに、トラブルが発生してしまった。全員が金床をたたきたいと希望したので、ジャンケンで三人を決めた。3度目に聴いた時に飽きがきてしまっていた子ども(○▽くん)、一番前の席で金床をずっと眺めながらいた子、その隣の子と三人が勝ち進んだ。3台の金床の前に座る時、前の席にいた二人が金床の取り合いを始めた。理由は、金床3台の内、1台が違う音色でとてもきれいに響くことを知っていたからであった。このトラブルは、音色にこだわり、『音』をよく聴けていたから起こったことであるが、たたき方を工夫すれば、また違った音色が出るかもしれないと、子どもたちからアドバイスもあり、譲り合う気持ちを大事に考えてほしいと願い、結局はジャンケンに頼った。

演奏後、三人のうち、○▽くんは、とても上手に金床をたたき、「○▽くん、上手やったで!」と隣の子から誉められた。このことで、「ぼくは、手首を使ってたたいたから、いい音だよ」と素直に表現できたし、聴いていた子どもたちも、○▽くんが工夫してリズムにのれたことを認めることができた。それと、音色にこだわり、金床の取り合いをした子どもたちも、「いい耳しているね」と誉められたことで満足し、「いい音が



出せたと楽しくできた」と、満足していた。

このように互いの音楽的なコミュニケーションによって、「気付き」が共有され、刺激され、深まり、広がっていく。ここから、実際の演奏の工夫や、「音」に関する興味関心が生まれ、高まり、子どもたちはこの学習の「意味」を広げていった。

3 「意味と内容」がひろがる場面

鉄の音は、すごくきれいでした。すごく明るくてきれいでした。床をかなづちでたたいたことがおもしろかったです。でも、DVDと音がちがったよ。今度は曲をよく聞いて、ぜったいに金床をたたきたいです。2回目、曲を聞いてやったときはちょうど終われませんでした。

かじやのポルカをはじめ聴いて、この感想を書いた子どもは、音楽が大好きな子である。曲の最後の部分で、金床を演奏している人に合わせるができなかったのが、この授業が終ってから、「次の時間は、絶対に合わせたい！」と言っていた。2時間目の1回目、視聴の時は、真剣に画面を眺め、曲を聴くことに集中できていた。2回目は、金床を打てなかったが、手で膝を打ち、曲に合わせていた。3回目にやっと金床を打てた時は、体全体で表現できていたので、曲が終わった時の表情は生き生きしていた。

金床をおもいきりたたいた。手がいたかったよ。でも、たたいてすぐに、かなづちを金床からはなしたら、手がいたくなかったよ。曲の中のほうですと、金床をたたくところがあって、1回目は、いっしょうけんめいたたいた。でも、曲とあわなかったよ。3回目、たたいたとき、たたいてすぐにかなづちをあげながらたたいたから、リズムにのれたよ。

この子どもは、友だちとのコミュニケーションがややとり難い子どもである。しかし、『かじやのポルカ』の金床に興味を示し、進んで金槌を持った。はじめてたたいた時は必死でたたいて、手が痛かったから、次には、たたき方を考えている。手首を使ってたたけば、リズムに遅れずにたたけることが分かり、リズムにのれたと表現している。その上、この子の表現を見て、隣の子が、「上手にたたけていた」とみんなに言ったことで、この子が認められ、意欲的に曲を聴けるようになってきた。

『かじやのポルカ』のDVDをはじめ見て、子どもたちは、様々な「感じ」をもった。金床を演奏している人に関心を示した子ども、金床の音色に関心を示した子、指揮者に関心を示した子に分かれた。

「感じ」たことは、表情や曲に対する身体の反応によって、読み取ることができる。しかし、どの場面で「感じ」をもったか、ということは見とれても、子どもの内面にどのような「感じ」が生まれたかということは、明確に掴み取ることはできない。ましてや、子ども同士が、それを共有することは難しい。子どもが感じたことの根拠を音を注意深く聴くことから導き出し、感じたことを楽器や身体で表現させたい。

『かじやのポルカ』2時間扱いの1時間目で、子どもたちは、金床の音を「感じ」、素直に表現できた。初めは、金床の音に驚き、体を動かしているだけの子も、3度聴いているうちに、金床の音に合わせて、手で膝を打ったり、手拍子をしたり、金床の音と子どもの動きが重なってきた。ということは、金床の音で「感じ」たことから、金床を打つタイミングの「気づき」を得たことになる。

2時間目は、グループに分かれて、実際に金床を打ったり、その様子を見たりすることで、互いに「気づき」を共有していく。また、初めから指揮者に関心を示し、見て「感じ」る子どももいた。曲に合わせて指揮をしたり、金床の音色に合わせて指揮にアクセントをつけたり、

子どもはここでも、「気づき」を表現した。オーケストラの演奏を見て、気に入った楽器（バイオリン、フルート、クラリネット）を演奏しているまねをする子もいた。この時、興味を示した楽器は、中学校で見せてもらったり、音を聴かせてもらったりした楽器であったので、実物に触れたことの効果があるように感じた。曲に合わせて踊りだす子も現れ、その子について、一緒に踊りだす子がいてもいいと願っていたが、踊りだす子どもはなかった。イスに上り、指揮者のまねや楽器を演奏しているまねをしながら、オーケストラの一員になった気分で曲を聴いていた子どもがほとんどであった。友だちの表現を見ながら、自分の表現を続け、それぞれの子が、まず、自分の「感じ」をもち、楽しんで、その中から「気づき」を得ていく姿が見えた。

4 成果と課題

本単元では、音楽を鑑賞することで、「感じ」たことをもとに、「気づき」を得て、曲とかかわりながら、表現活動をおこなうことであった。そして、その過程において、子どもがどのようにまなざしを共有していったかということが研究課題であった。

自分の「感じ」や「気づき」を表現することは、まなざしを共有しようと働きかけることである。曲を聴きながら、友だちの前で、タイミングを計り、金床を打つ子どもの姿は正しくその場面である。また、それを見ている子どもが、評価したり、一緒にやってみたりすることによって、まなざしの共有は進んでいく。

本単元の学習を追ってみると、学習の成果は実際の子どもの言葉や、活動から前述したように読み取ることができる。しかし、まなざしの共有ということで考えると、教師の見とりだけが重視されるのではなく、子どもたち同士のコミュニケーションの有りようが重要になる。

そこで、子どもが、まなざしを共有していく際の、音楽的コミュニケーションのあり方について考えていきたい。音楽的コミュニケーションは、子どもが『音』にこだわることで進む。具体的に言うと、リズムを手拍子で表したり、音を楽譜で表したり、実際に演奏してコミュニケーションをしようとする態度を養うことである。そこに至るまでの課題について述べる。

※『音』を注意深く聴くことができない

子どもたちは、「音」を注意深く聴くことに慣れている訳ではない「音」を注意深く聴くためには、技能面のアプローチも必要になる。音楽を聴く機会をたくさん与え、聴き比べができるようにしなければならない。そんな中で、違いに気づく技能を身に付けさせなければならない。また、音楽の授業場面だけではなく、日常生活においても、注意深く聴くことができるような機会を与えることも必要になる。

同時に、低学年の子どもの場合、「聴く」ことを通して、「感じ」や「気づき」を得るために、いくつかの手立てが必要になる。「気づく」ためには、同じ曲を何度も繰り返し、注意深く聴かなければならないこともある。子どもの集中力や、もう一度聴いてみようという、好奇心をかき立てるための発問の工夫や、場の設定の工夫が求められる。クイズ形式で発問をしたり、聞く姿勢に変化を与えたり、聞くポイントを明確にしたりしていかなければならない。もちろん、子どもが興味関心をもつ曲選びは、重要な要素となる。

※ 聴いた『音』をもとに、どう表現していいかわからない

「表現」ということに関して述べると、技能面のアプローチとしては、基本的な技能を、反復練習により、身に付けさせておかなければならない。その上で、教師が模範となる音楽的コミュニケーションを用いて、意識的に子どもとかかわっていかうことが求められる。